

No.177

2015.
9.15

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

明後日新聞社文化事業部

日比野 克彦（岐阜県美術館 館長）



この12年、毎年夏になると行く場所がある。新潟県十日町を中心にして展開している大地の芸術祭である。私の作品「明後日新聞社文化事業部」は100人ほどの小さな集落で行っていて、3年に1度のトリエンナーレの時期は、多い日だと1日に200人近くの観客が廃校になった小学校を活用している「明後日」を見にやってくる。

ここを起点として2003年に始まった朝顔のプロジェクトは、2005年に水戸芸術館、2006年に岐阜県美術館、熊本市現代美術館、2007年に金沢21世紀美術館とつながっていった。それぞれの美術館の館内では私の作品を展示し、美術館の外壁とか街中で、その土地らしさのアートプロジェクトを住民とともに始めるきっかけとなっている。

岐阜においても2006年から「こよみのよぶね」という、長良川で12月22日の冬至の日に、市民とともに製作した大きな巨大数字の行灯を屋根の屋根に取り付けて、川の流れに数字が浮かぶというものを始め、今年で10年目となる。その節目の年に、また1つ新なるものが現れる。

岐阜県美術館の庭で私がディレクションするアートプログラム「アートまるケット「花は色の棲家」」というものである。

これは岐阜県立森林文化アカデミー、岐阜県立国際園芸アカデミー、岐阜県立国際たくみアカデ

ミー、情報科学芸術大学院大学（IAMAS）の県の4つの教育機関の教員と学生との連携で制作しているものである。庭の木々を舞台にした参加型展示物となる。

東京都美術館においても、10月半ばまで「花は色の棲家」と連動する「棚は物の棲家」という作品を展示している。こちらは館内の巨大空間に高さ10メートル幅15メートル奥行き3メートルの巨大な棚を木材で組み、フロアにある種々雑多なものを観客が標本箱の中に、あつめて、ならべて、しらべて、自分の博物館を箱の中ですぐに、大きな棚に並べていくという作品である。

この夏は、屋外型アートプロジェクトとして「大地の芸術祭」のほかに、新潟市で行っている「水と土の芸術祭」、水戸芸術館を中心に街で行っている「CAFE IN MITO R」そして来年から始まるさいたまトリエンナーレのイベントが重なり、アート漬けな夏となっている。日本中がアートまみれになっているのではないかと錯覚するほど、アートな毎日を過ごしている。

まだまだ暑い日が続きます。

今、明後日新聞社の2階の窓から朝顔を見ながら原稿を書いています。教室の入り口には「明後日新聞社の理念」が掲げられています。

明後日新聞社の理念

1. 明後日新聞社は明日のその次に思いを描きます。
1. 明後日新聞社は、まだ見えないけど、なんとなく見えるかな、を大切にします。
1. 明後日新聞社は、もうすぐやってくるという気持ちと、そんな先のことなどわからない気持ちが共存する場所を活動の起点としています。
1. 明後日新聞社は、同じようなことを感じている人がどこかにいるというふうに考えたいという小さな気持ちを見つめ続けます。

平成27年度岐阜県博物館協会通常総会

期 日：平成27年5月23日（土）

場 所：岐阜県博物館

参加者：95名（委任状を含む）

総 会

平成 27 年度岐阜県博物館協会通常総会が、平成 27 年 5 月 23 日に岐阜県博物館ハイビジョンホールにて開催されました。

来年度に岐阜県博物館協会創立 50 周年を迎えることを踏まえ、若宮多門会長に挨拶を頂きました。



つづいて、平成 27 年度博物館関係功労者として、岐阜県先端科学技術体験センター館長 飯尾正和様が表彰を受けられました。



次に来賓を代表して、岐阜県教育委員会教育長 松川禮子様よりご祝辞を頂きました。



議事は、平成 26 年度事業報告と収支決算報告、平成 27 年度事業計画と収支予算など 5 つの議案が原案のとおり承認されました。

平成 27 年度の主な活動

- 1 岐阜県博物館協会創立 50 周年記念事業の推進
- 2 県民文化講演会の開催
- 3 研修・研究会、公開講座の開催
- 4 機関紙の発行
- 5 ホームページの作成
- 6 地域博物館活性化事業の推進
- 7 東海三県博物館協会研究交流会の開催

創立 50 周年記念事業について

3 つの指針「のこす」「ひろめる」「たかめる」に基づく部会を設け、以下の事業を企画、実施することになりました。

1 「のこす」部会

岐阜県博物館協会として、その基盤とアイデンティティを確立する。

- ・ 50 周年記念誌の発行
- ・ 50 周年記念式典の開催
- ・ デザイン戦略によるイメージアップ

2 「ひろめる」部会

広く県民に対し、博物館を身近に感じてもらう。

- ・ 文化講演会の開催
- ・ スタンプラリーの実施
- ・ 県内博物館を巡るツアーの実施
- ・ 連携企画事業の実施
- ・ 雑誌、新聞等による情報発信
- ・ 冠事業の実施

3 「たかめる」部会

職員の資質の向上をはかるとともに、内外ネットワークを強化する。

- ・ 職員の資質向上、共催事業の実施
- ・ 文化財レスキューネットワークの構築
- ・ 関係機関との連携

平成27年度県民文化講演会

期 日：平成27年5月23日（土）

会 場：岐阜県博物館

参加者：88名



↑客席に語りかける講師

岐阜県博物館協会通常総会に続いて、アナウンサー・古典芸能解説者として著名な葛西聖司氏による「岐阜県の伝統芸能—その豊かな風土—」と題した講演会が行われました。

葛西聖司氏のプロフィール

東京都生まれ。NHK エグゼクティブアナウンサーとしてテレビ・ラジオのさまざまな番組を担当され、現在は、その経験を生かし、歌舞伎など古典芸能の解説や講演、また日本伝統文化の講義などで大学の教壇にも立ち、朗読教室や執筆活動も続けられています。歌謡曲ステージ司会も定評があります。

【著書】

『文楽のツボ』（NHK 出版）

『名セリフの力』（展望社）

『ことばの切っ先』（小学館）

【所属】

日本演劇協会会員（評論）

NHK 文化センター講師

朝日カルチャーセンター講師

早稲田大学公開講座講師

日本体育大学非常勤講師

講演内容

岐阜県では、民俗芸能、中でも、地芝居（歌舞伎や人形浄瑠璃）が数多く伝承されています。本格的な機構を備えた芝居小屋も現存し、近年まで、地域の人々によって演じられる身近な存在でした。



↑↓客席とのキャッチボールもさすがの貫録



講演では、観劇と演劇の双方を地域住民が担い、芝居を楽しむ豊かな地域文化が育まれてきた岐阜県の地域性を、他地域の取材等の体験をもとにしてお話されました。

ときに冗談を交え、演台から客席まで下りて問いかけるソフトな語り口で、地元だからこそ忘れがちな郷土文化の豊かさを再認識する1時間30分でした。

（岐阜県博物館 松井健治・南本有紀）

平成27年度博物館関係功労者表彰

飯尾正和（岐阜県先端科学技術体験センター 館長）

この度、岐阜県博物館協会から「平成 27 年度博物館関係功労者」として表彰していただき、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。これからも、理科が好きになり、将来科学者や技術者になって日本の科学技術の発展に役に立ちたいという強い夢を持つ子供たちの育成と大人たちの科学技術への興味関心を喚起するという当館の目的の達成のために尽力したいと思っています。

岐阜県先端科学技術体験センター（愛称のサイエンスワールドとして親しまれています）が開館した平成 11 年（1999 年）当時、21 世紀に向けて日本は「科学技術創造立国の構築」を目指したが、次代を担うべき子供たちに「理科ばなれ現象」が生じ大きな社会問題となりました。国はいろいろな方策を打ち出したが、その成果はあまり見られなかったので「子供たちの科学に対する知識と体験の遊離が理科ばなれの大きな要因である」として、科学体験に特化した先端科学技術体験センターの設置を決め、その第 1 号として岐阜県が国の補助を受けて作ったのが当館です。

そのために、当館は一般の科学館のような展示物がなく科学体験に特化した全国唯一の科学館として開館しました。当時、展示物が無い科学館なんてお客さんは行くだろうか、の風評の中、科学技術について驚き、不思議、感動、夢を感じ、さらに科学的な思索ができるような人材を育成するためにはどのような科学体験を提供したら良いか、の大きな課題に職員が挑戦し、多種多様な体験メニューを開発すると共に、親子そろって科学技術の素晴らしさを実感してもらうためにいろいろな事業を展開してきました。

多くの職員やスタッフの努力のお蔭で開館以来 17 年目、入館者は減少することなく、昨年度は 10 万人の万台を超えるなど多くの皆様に愛され期待される科学館に成長することが出来ました。休日に多くの親子が科学実験・工作に目を輝かせて取り組んでいる姿を見ると理科ばなれ現象が解消したようにも思いますが、今後も「オンリー 1」の科学館として更に発展していきたいと思っています。

第85回会員研修会 LED講座Ⅰ 基礎編 （LED照明 心構え編）

期 日：平成26年12月3日（水）

会 場：岐阜市科学館

参加者：37名

講 師：藤原 工 氏（機灯工舎代表 美術照明家、光文化研究家、照明デザイナー）

博物館におけるLED照明にかかわって、LEDの仕組みと特徴、何をどのように照らすのか、対象に応じた照明の当て方について、株式会社灯工舎 代表取締役 藤原 工 氏よりご講義いただいた。

「色とは何か」という色の基礎から始まり、LED照明で白色を表現する方法の話、各社の色表現の違い、LED照明の違いが博物館におよぼす影響など、博物館でLED照明を扱うことのメリットやデメリットを広く学ぶことができた。

はじめに、色の基礎知識を学習する時間があり、「演色評価数（Ra）」や「相関色温度（K）」などの照明に欠かせない重要事項も、その意味を理解しながら講義を受けることができた。



最終的にLED照明を使用するか否かは各施設独自の判断になるかとは思いますが、判断の際にメリットやデメリットを十分に理解しておくことは非常に重要であり、特に照明のLED化は一度行くと元に戻すことは難しく、判断は慎重に行うべき内容である。

今回の講義は、博物館施設にとって広く参考となるものであったのではないだろうか。

（岐阜市科学館 川那賀一）

第86回会員研修会 LED講座Ⅱ 応用編 (LED照明 実践編)

期 日：平成26年12月11日(木)

会 場：岐阜県美術館

参加者：38名

講 師：藤原 工 氏 (燐灯工舎代表 美術照明家、光文化研究者、照明デザイナー)

12月3日に開催された第1回LED講座入門編に引き続いての第2回LED講座では、応用編として実践を重視したLED講座を開催した。

第1回LED講座(基礎編)で講義いただいた藤原工氏に進行を依頼。博物館・美術館の照明を製造販売する4社にサンプル機材を実際に持ち込んでもらい比較した。

協力企業は博物館・美術館の照明の実績のある、エルコライティング株式会社、コクヨファニチャー株式会社、シーシーエス株式会社、パナソニック株式会社ライティング事業部の4社。会場となった岐阜県美術館内スタジオの窓を塞いで外光を遮断し、4つのブースを設けて各社の得意とするLED照明を照射した。

前半部では、藤原氏から配布された機種別評価シートをもとに、各社の機種それぞれの発行方式、色温度、平均演色、調光性能、グレア、付属品の種類やバリエーションなど個々人が個別に細かくチェックした。照明器具そのものの性能はもちろんのこと、デザイン性(目立たない)、大きさや重さ(コンパクト)、扱いやすさなど、博物館美術館ならではの視点も評価を大きく左右した。



後半部では、参加館が持ち寄った資料、作品を展示し、ひとつの作品を各社のLED照明で順に照射比較した。鉱物、剥製、着物の裂地、彫刻、絵画(油彩画、パステル画)、円空仏(模刻)など様々な資料が集まり、それぞれの担当学芸員が好ましいと思う照明について意見を述べた。

各器材に得意分野があり、照射する作品によって見え方も異なる。重要なのは使用するわれわれの側が対象とする資料をどう照らしたいのかを明確に意識することである。今回の講座は、照明の適不適

を判断する基準を学ぶ良い機会となった。この分野については、日進月歩の情報を常に更新していくことが求められる。

(岐阜県現代陶芸美術館 正村美里)

第87回会員研修会 ワークショップ・教育普及事業を考える —事例報告と意見交換会—

期 日：平成27年3月4日(水)

会 場：岐阜県現代陶芸美術館

参加者：35名

ワークショップ・教育普及について、協会加盟館の生き物、古生物、現代美術という全くジャンルの異なる3館の担当者により先進的・特徴的な事例報告をしていただいたのち、参加者全員による意見交換会をおこないました。

アクア・トトぎふ展示飼育部体験学習チーム課長 圓戸恭子氏より「イモリとあそぼう—生体と展示を利用したプログラム」、瑞浪市化石博物館学芸員 安藤佑介氏より「みずなみ化石教室—体験型ワークショップの広報と現状」、美濃加茂市民ミュージアム学芸員 和歌由花氏より「現代美術レジデンスプログラム：大巻伸嗣プロジェクト『世界のつくりかた』」についてそれぞれ事例報告をいただきました。圓戸氏の朝まで生き物と一緒に過ごすことができる「お泊りナイトツアー」、安藤氏の「瑞浪Mioちゃん」という、少女キャラクターをつかった有効的なPR、和歌氏の作家の指揮により大人も子供も参加できるアートプロジェクトなど、興味深い内容ばかりでした。



引き続き、参加者全員が円座となって岐阜県現代陶芸美術館学芸員 山口敦子氏の進行により、各館が抱えている問題点などの提起があり、発表者や参加者より解決のための方策などが話し合われました。

(岐阜県現代陶芸美術館 立花 昭)

平成27年度東海地区博物館連絡協議会・ 日本博物館協会東海支部総会

期 日：平成27年7月2日(木)～3日(金)
会 場：新江ノ島水族館(神奈川県藤沢市)
参加者：神奈川・岐阜・静岡・愛知・山梨
の5県から62名(岐阜県からは8名)

「えのすい」の愛称で親しまれ多くの来場者が訪れる新江ノ島水族館で今年度の総会が開催された。江ノ島のある片瀬海岸に立ち、遠くには富士山も望める絶景の場所にある。昨年、開業10周年を迎え、活動は多彩、神奈川県博物館協会の牽引的役割を果たす水族館である。

総会では、昨年度の事業報告及び決算、新年度の事業計画及び予算が議題として提出され原案通り承認決定された。日本博物館協会からは半田専務理事が出席し、主要事業の説明があった。今回特に力が入っていたのが、多くの関係者の誘致活動が実ったICOMの2019年京都大会の件である。開催に向け組織を整え準備が進められていくが、国内博物館関係者もそれに向けそれぞれ課題意識を深めていく必要があると感じた。

総会の後、館内施設及び展示見学と「うなぎの博物誌」と題した講演(講師：日大生物資源科学部教授・塚本勝巳氏)があった。



[水族館大水槽前の解説風景]

施設見学では、水族館の協力を得て、バックヤードツアーが実施された。通常見ることのできない水槽の裏側は、展示生物の繁殖・成育といった研究のいわば水族館の根幹部。非常に興味深く見学することができた。

2日目は江ノ島周辺と神奈川県立生命の星・地球博物館のそれぞれの見学会が開催された。

来年度は岐阜県での開催が予定されている。
(美濃加茂市民ミュージアム 可児光生)

館・園紹介 No.157

山 野 草 園

〒508-0111 中津川市瀬戸 1655-2
TEL 0573-65-3818(午後5時以降)

山野草園は広大な広さで、自然の地形を活かし、10年がかりで、北海道から九州まで回って集めた150種以上の山野草を植栽してあります。

特徴としては、春一番に咲くフクジュソウ、ユキワリソウ、シラネアオイ、サルメンエビネ、レンゲショウマ、ヤマユリ等が植えてあります。震災前の福島県で集めたシラネアオイや、絶滅危惧種のエビネ、貴重なヒメサユリなども取りそろえ、四季折々楽しめるようにしました。

10代の頃身につけた技術を生かして作った、地元の国史跡・苗木城跡を模した石垣も、整備しております。

花のない時季とか天候不順な時でも、2階建ての休憩施設があり、花の写真パネルが所狭しと展示してあります。持参の食事でもしながら、心和む会話もはずむ事でしょう。1階と2階には、水洗トイレも完備しております。

大勢の協力者があって、開園する事ができました事を、うれしく思っております。

この山野草園は、中津川市街から木曽川の玉蔵橋を渡ってまもなくです。どうぞお気軽にご来園ください。



山野草園のご案内

携 帯	090-2136-3818 (予約の場合)
交 通	JR 中央本線 中津川駅より車で10分
開園時間	9:00～16:00 (電話予約受付可)
休園日	不定休
入園料	無 料
駐車場	10台(無料)・大型バス可(無料)

(山野草園 坪井幸夫)